AMDA

レバノンでの活動報告

「政府との協力体制できた」

停戦後のレバノンで診療活動をするAMDAのメンバー

イスラエル軍による砲撃で多数の死傷者が出たレバノンで医療救援活動を続けていたAMDAの吉田修医師（38）ら4人が帰国、8日、岡山市楢津のAMDA本部で記者会見した。

会見したのは、この日朝帰国した松浦多賀雄医師（34）と清水美恵子看護婦（30）、先に帰国していた岩本功医師（55）の救援チームのメンバー3人と、AMDAの菅波茂代表（49）。チームは先月24日成田空港を出発、26日にレバノンの首都ベイルート入りした。現地では在ベイルート日本大使館やベイルート赤十字の協力を得て、約2・5トンの医薬品を運び込んだが、翌27日朝、停戦が成立。30日からはティールなどレバノン南部の都市で医療活動を実施、5月4日までに約400人を診療した。

メンバーは「現地は赤十字をはじめボランティア活動が非常に活発」「ベイルートは予想外に被害が小さかった」などと現地の様子を報告。停戦の成立と、現地のNGOの活動が活発なことから予定していた2、3次のチーム派遣は中止することも決めた。

また今回の活動は、日本大使館が初めて現地での調整役を行うなど、政府との本格的な協力体制ができた初めてのケースといい、菅波代表は「今後も政府とはいい関係を保っていきたい」と話していた。